

小特集■ ASIAGRAPH2014 in Bali / VR 文化フォーラム in Bali 報告



左より、河口洋一郎先生(ASIAGRAPH 実行委員長, 東京大学), 大橋力先生(国際科学振興財団主席研究員), 仁科エミ先生(放送大学)

■総括

池井 寧 (ASIAGRAPH Program CoChairs)
首都大学東京

小木哲朗 (ASIAGRAPH Program CoChairs)
慶應義塾大学

2014 年 4 月 25 日から 27 日に、インドネシアのバリ島で ASIAGRAPH 2014 in Bali および VR 文化フォーラムが共同開催された。これまで日中韓で行われていた ASIAGRAPH は、昨年より環太平洋地域に拡大され、今年は東南アジアのバリ島での開催となった。バリ島は海や山の豊かな自然と、アジア独特の伝統文化や芸術が残る場所であり、ASIAGRAPH と VR 文化フォーラムの開催にふさわしい場所であった。今回は、研究発表の他、放送大学の仁科エミ教授のご尽力により、バリ島の様々な伝統文化体験が実現された。

■ ASIAGRAPH2014 in Bali 企画報告

仁科エミ
放送大学

電子技術が創る先端的でバーチャルな世界に取り組む研究者にこそ、伝統智への深い造詣や豊かなリアル世界の体験が重要なのではないかと……こうした観点から ASIAGRAPH 2014 in Bali は、研究発表とともにインドネシア・バリ島の伝統文化体験を重視して企画した。“神々と芸術の島”として知られるバリ島は、その地球上屈指の伝統的音楽、舞踊、絵画、彫刻などで、世界の現代芸術に大きな影響を及ぼしてきた。さらに、神々・人間・自然の調和を重視するバリ・ヒンドゥーの哲学を背景に生まれた美しい棚田とそれを維持管理する水利組合は、「バリ州の文化的景観」として 2012 年にユネスコ世界遺産に登録されている。一方、数多くの観光客を受け容れるバリ島社会の変貌は著しい。そこで今回の ASIAGRAPH では、長年にわたるバリ島文化の国際化への貢献で現地政府から叙勲されている大橋力先生(国際科学振興財団主席研究員, 日本 VR 学会特別顧問)の協力をえて、現代に継承されている

バリ島文化の本質を五感で体験しようという盛りだくさんのプログラムとなった。

研究発表会場は棚田に囲まれたオープンエアのアトリウムで、ゆったりと流れる時間の中で有意義な研究交流やパネルディスカッションが行われた。続くエクスカッションでは、世界遺産の絶景の棚田、棚田を支える水の寺院、伝統工芸の工房、19 世紀末から国際的芸術村として発展してきたウブド村の見学などを行った。さらに、バリ島きってのグループによる青銅の交響楽“ガムラン”の特別上演と演奏の手ほどき、百余名で演じられる神秘的群衆芸能“ケチャ”、パリ植民地博覧会(1931 年)で現代演劇の先駆者アントナン・アルトーを「地上に比類なき演劇」と驚愕させた超現実的神話劇“バロン劇”、最近開発された新発想のスペクタクル・パフォーマンス“バリアグンショー”を鑑賞した。バリ島の自然環境の濃密さに劣らぬ密度の高いこのバリ島体験が、参加者の方々の今後の研究や創作への何らかの刺激となれば幸いである。

■ ASIAGRAPH2014 in Bali 参加報告

山本健太郎
東京大学

インドネシアのバリ島で行われた本年の ASIAGRAPH では、初日に研究発表とカルチャートークが行われた。研究発表では、9 件のペーパーセッションと 10 件のポスターセッションが設けられ、工学、デザイン、心理などの多様な分野における最新の技術や知見について報告がなされた。慶応大学の小木哲朗先生の発表では、ドームディスプレイを用いた映像表現法が提案された。またその表現法において、投写方向と観察方向のずれが 30° 以上になると不快感が高くなる可能性も示され、工学的だけでなく心理学的な見地からも非常に重要な指摘であると感じた。

九州大学の妹尾武治先生の発表では、ベクションの強度に影響する要因として、新たに錯覚的な刺激の運動、観察者の血中酸素飽和度、身体的負荷の 3 つの要因が提案された。これまでの研究では刺激のパラメータを操作したものが多かったため、観察者側の要因を

検討した点が新しく、興味深かった。また同じくベクションを扱った研究として、首都大学東京の村田佳代子氏の発表では、視覚ではなく皮膚感覚により生じる自己誘導運動について検討されており、風を用いた手法に興味を引かれた。

慶応大学の小松英海先生は、生き物らしさや意図性の知覚について、主に対象の動きに着目した先行研究が総説され、不規則的な動きの変化が生き物らしさや意図性の認識に重要に働く可能性が示された。また岐阜聖徳学園大学の阿部慶賀先生の発表では、身体的負荷による距離感印象の変化という、身体化認知による新たな影響が示された。

研究発表後のカルチャートークでは、仁科エミ先生によるバリ島文化についての解説、そして大橋力先生による講演が行われた。大橋先生の講演では、マズロー等の古典的な心理学・科学哲学の知見を引用しつつ、人間の持つ欲望を生存上不可欠なもの・不可欠でないものの2つに分類し、それらと A-10 神経系における脳活動との関連を鋭く指摘されており、非常に心惹かれる内容であった。

二日目はバリ芸能の鑑賞と、寺社への参詣を行った。バリ島の人々を支える文化的背景について深く学ぶとともに、独特な芸術表現の様式に触れる貴重な体験となった。また夕方のカルチャートークでは、東京大学の河口洋一郎先生を始めとする先生方によるバリ島と超臨場感についての講演が行われ、バリ島の自然と芸術や映像などとの関連も触れられるなど、興味深い内容であった。

今回著者は都合により三日目のツアーには参加できなかったが、非常に内容の濃い有意義な二日間となった。

■ VR 文化フォーラム 2014 in Bali 参加報告

伊藤啓一
未来工学研究所

今回の VR 文化フォーラム 2014 in Bali は大橋力先生

と仁科エミ先生のご尽力により、2014 年 4 月 25 日から 27 日にかけて、インドネシア・バリ島のウブドにて開催された。ウブドは空港のあるデンパサールから車で 1 時間ほど山間に位置するオランダ統治以前の王宮のあるバリの文化の中心地とされるエリアであり、バリの文化を体験する絶好の場所である。

インドネシアは世界最大のイスラム教国家であるが、バリ島はバリヒンズー教の伝統に基づく文化と、芸術を有する島である。

バリの文化は『世界遺産』の「棚田」を見学し、「水の女神の寺院」に参詣した。「棚田」は“スバック”と呼ばれる農家の自治組織によって共同で管理されており、共助の精神で美しい棚田の景観を守っていた。「水の女神の寺院」には住民がお供え物を供えて神に祈りを捧げていた。我々も祈りを捧げる機会を得た。

バリの芸術は「バロン劇」「バリアグンショー」「ケチャ」「ガムラン」を鑑賞した。さらにバリの美術を集めた「ネカ美術館」と彫刻の「芸術村」を訪問した。これらの芸術は 20 世紀に入りウブドの王宮がパトロンとなり推進した「一村一品」政策により誕生したものと聞かされたが、その高度な技術と芸術性には目を見張った。

「バロン劇」「バリアグンショー」は劇場に出かけて鑑賞したが、「ケチャ」「ガムラン」はプライベートに上演を行ってくれた。会場は大橋先生のお住まいの庭園で、「ケチャ」は 26 日にバリ最大最高のグループ“スマラ・マドヤ”が、「ガムラン」は 27 日にバリ屈指のアンサンブル“ヤマ・サリ”がそれぞれ行ってくれたので大変感激した。また、「ガムラン」は“ヤマ・サリ”の演奏者が我々に演奏の手ほどきをしてくれた。見た目と違い演奏の難しさに驚いた。一流演奏者が楽器まで揃えて対応してくれたのには感激した。

今回のフォーラムは類い希な経験と感動を得ることができた。大橋先生と仁科先生に大変感謝しております。

来年の文化フォーラムはまだ未定のようなのだが、今回のような素晴らしいフォーラムの開催を期待したい。



棚田



ガムラン演奏体験(プラナチャンティホールにて)

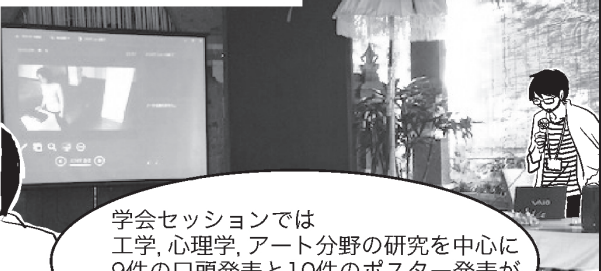


大橋先生・仁科先生(左端)とガムランの踊り手と

ASIAGRAPH2014参加報告 コミック版 東京大学 櫻井 翔



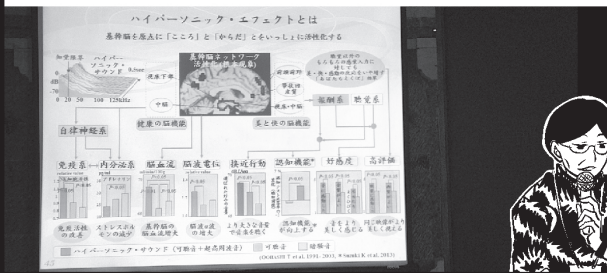
今回は
ASIAGRAPH2014
についての報告です



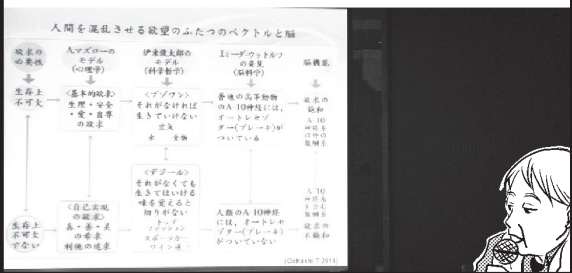
学会セッションでは
工学、心理学、アート分野の研究を中心に
9件の口頭発表と10件のポスター発表が
行われました

会期: 2014年4月25日~27日
会場: バリ: プラナ・サンティ講堂およびウブド村全域

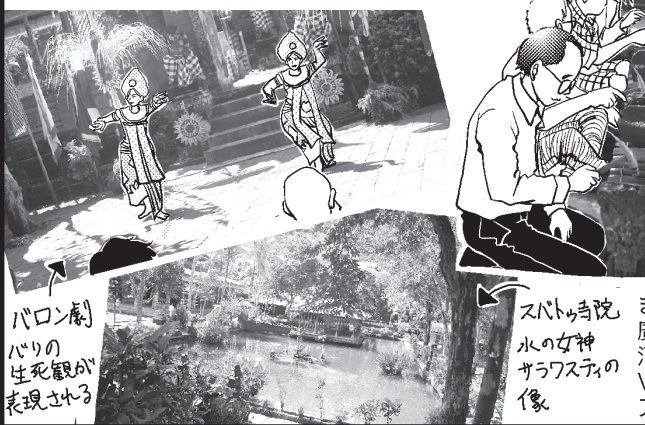
仁科先生によるバリ文化の紹介では
「棚田の見どころ」「芸能」「ピタマハ(偉大なる光)運動」の
3つのキーワードに沿って
科学や歴史といったさまざまな観点から
バリ文化を読み解くお話がなされました



また、『AKIRA』の音楽でも有名な芸能山城組の
代表である山城祥二氏こと大橋力先生による
「人間を混乱させる欲望のふたつのベクトルと脳」
と題した講演では、心理学や脳科学の観点から人間の
欲望のメカニズムについてのお話がなされました



2日目・3日目においては、
バリの伝統芸能や寺院の見学などを通じ、
バリの社会を形作る優れた制御システムとしての
バリ文化を実際に体験してきました



がムラン実体験
(プロ奏者の指導付き)

ラーマヤナを題材とする舞踏劇「ケチャ」
バリの伝統的舞踏を基に、1920年代に
ドイツ人の進言によって現型が作られた



また「バリと超臨場感」と題したカルチャートークでは、
廣瀬先生(東大)、井ノ上先生(NICT)、岸野先生(関学)、
河口先生(東大)により、文化の保存や進化に対する
VR・感性工学・アートといったさまざまな側面からの
アプローチについて語られました

単なる情報としてだけではなく、直にコンテンツに触れる
機会というのは非常に重要であると改めて感じた3日間でした



次回、ASIAGRAPH2015の
開催場所は未定のため、
VRSJからの告知をお待ちください

